

# 小規模公営住宅における高齢世帯の住まい方

## - 宇部市HS団地の事例分析 -

中園真人 (感性デザイン工学科) 大庭知子 (感性デザイン工学専攻) 佐々木俊寿 (宇部市)

### Living style of elderly households in small space public house, case study of HS housing Complex in UBE City

Mahito NAKAZONO (Perceptual Sciences and Design Engineering)

Tomoko OHBA (Perceptual Sciences and Design Engineering)

Tosikazu SASAKI (Ube city)

The object of this research is HS housing complex owned by Ube-city. As for the Ube city-owned residence about 30 percent of the whole is wooden and semi- fireproof building, and rebuilds and abolition are considered. Updating of these stocks will become the main enterprise for ten years from now on. Moreover, the durability of public housing built in the 1970s is will be exhausted, and rebuilds of vast quantity of stocks will be difficult in view of the amount of enterprises in recent years. Therefore, Ube-city also has to recommend the improvement of the stock in 1970s. This research analyzes living style of elderly households in small space public houses, and shows the extraction at the time of the dwelling improvement.

**Key Words:** Living style, small space public house

#### 1. 序論

宇部市営住宅は、全体の約3割を占める木造・準耐火造ストックの建替・用途廃止が検討されており、今後10年間はこれらの更新が中心的な事業となる。

また、1970年代に建設された市営住宅の耐用年限が迫ってきており、1970年代だけで約1000戸と膨大なストックを一齐に建替えるのは近年の事業量からみて困難なため、非耐火造ストックの更新とともにこれら1970年代ストックの改善もすすめていかなければならない。

2000年度に公営住宅ストック総合改善事業制度が創設され、公営住宅ストックの改善活用を事業の中心に据えた。具体的に述べると、住宅改善を進めようとする自治体は、建替事業を含め、全面的改善、個別改善に関する「公営住宅ストック総合活用計画」を策定し、これに基づいて事業を進めることとなり、宇部市でも、現在、「宇部市営住宅ストック総合活用計画」が策定されている。

本稿では、公営住宅の高齢者向け住戸改善時における課題の抽出のために行った住まい方調査の概要を載せ、分析を行った。

#### 2. 調査対象団地の概要

本団地は、中層耐火造廊下型で、1棟、1969年建設、2,3棟、1970年建設の南面2室の2Kという住戸プランである(図2)。中心市街地に立地しており、図

3に示すように、商業施設、医療施設、交通機関、教育施設、公共施設などは充実しており、宇部市営住宅の中でもHS団地は土地の利便性が良い方である。また、住戸改善対象団地のうち、65歳以上高齢化率・55歳以上高齢化率がともに最も高く、居住者層の高齢化率が進んでいる団地である(図4,5)。

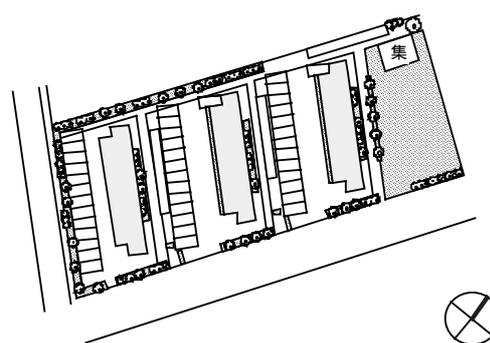


Figure 1 Site plan of HS housing complex

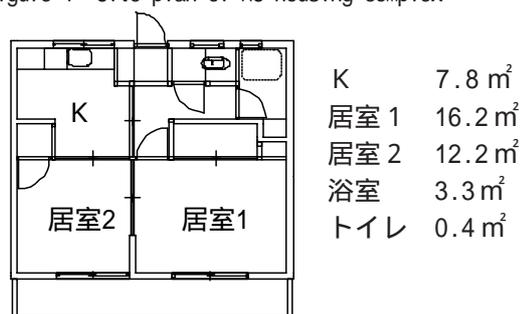


Figure 2 Dwelling unit plan (34.56 m<sup>2</sup>)

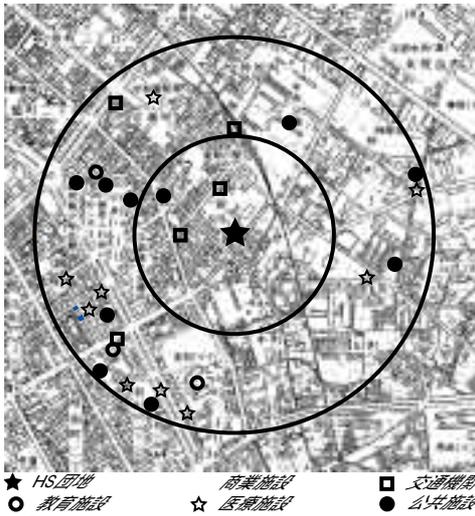


Figure 3 Facilities around HS housing complex with a radius of 500m

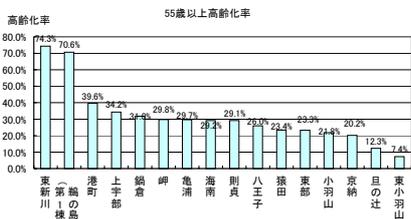


Figure 4 The ratio of over 55 years-old households



Figure 5 The ratio of over 65 years-old households

また本団地は、前述した公営住宅ストック活用計画によって定められた、宇部市営住宅の住戸改善対象団地の中で最初に住戸改善が来年度実施される団地である。住戸改善対象団地の1,2階の住戸の占める割合は平均すると約4割で、高齢化率がこれを超えなければ、高齢者向け住戸改善のみで対応することができる。これを超えた場合には、EV設置もあわせて検討する必要がある。高齢者対応住戸改善 + EV 設置の選定方針は以下に示すとおりである。

高齢者対応住戸改善 + EV 設置選定方針

- ・平成 10 年度以前建設
- ・4 階建て以上
- ・65 歳以上高齢化率 20% 以上
- ・55 歳以上高齢化率 40% 以上

- ・生活利便性の高い土地である
  - ・駐車場や倉庫の位置などに問題がなく物理的にEVが設置可能なもの
- 本団地は、生活利便性の高い土地で、高齢者対応住戸改善 + EV 設置の条件に該当している。

3. 調査概要と高齢世帯の特性

3 1. 調査・分析

調査は、調査員が直接各住戸に伺い、個別に聞き取り調査を行った。調査時期は2002年11月である。住まい方調査の方法は以下のとおりである。

現在の住宅に対する満足度、将来的な希望に関するアンケート調査。

家具配置、寸法の実測及び展開面のスケッチ。

1日の生活時間帯、部屋の使い方、団地内での近所付き合いに関するヒアリング。

調査の内容は住戸内における生活行為、家具配置の全般にわたっているが、住生活の動向として今回特に注目されたのは、Kあるいは6帖、4.5帖を中心とした私生活の動向である。住まい方調査を実施した世帯数は25世帯である。これは、HS団地全体の世帯数48世帯の約半数にあたる。単身世帯は全体で32世帯であり、全体の3分の2を占めている。調査実施数は14世帯である。夫婦や親子の2人世帯が全体で15世帯で、調査実施世帯が10世帯。家族4人世帯が1世帯であった。

調査実施世帯の居住年数の平均は22年であり、その内、建設当時から入居している、居住年数が31年の世帯が7軒あり、居住年数が長い。分析にあたっては、居住者の性格の違いと住み方の差異から、多様な住み方を分類し、それぞれのグループ別に考察を加えるという方法をとった。また、今回は、4人家族の世帯1軒、親子2人の世帯3軒及び、特殊な住まい方の世帯2軒は分析から除外した。よって、25世帯調査し、分析対象となった世帯は19世帯である。

3 2. 食事室のとられ方

K + 2室の住戸プランでは食の生活から見ると、大きく主室6帖で食事をする住まい方「主室食事型」と、副室4.5帖で食事をする住まい方「副室食事型」に分かれる。

また、くつろぎとは、ヒアリング結果から、主にTVを見る行為であることがわかっている。居場所とは、居住者が住戸内でいつも居る決まった場所のことである。一日の生活時間帯をヒアリングし

	40~44歳	45~49歳	50~54歳	55~59歳	60~64歳	65~69歳	70~74歳	75~79歳	80~84歳	85~90歳	計
夫婦世帯			1(1)	1(1)	2(2)	2(2)	3(1)				9(7)
単身世帯	0	0	1(1)	2(2)	5(2)	5(1)	11(4)	7(3)	1(1)	0	32(14)
二人世帯			1(1)	2(1)	1	2(1)					6(3)
4人の家族世帯	1										1

Table 1 Household composition classified by age

( )内...調査世帯数

て、TVを見る時間を集計した結果、後期高齢単身者が飛びぬけて時間が長い事が分かる。どの世帯も同様に、食事をする場所もくつろぐ場所も同じであるので、いつも居る場所は食事兼くつろぎの場所となり、居場所となる。

### 3 4. 食事室と寝室の関係

6帖と4.5帖の2部屋しかない住戸内で、食事室と寝室が重なるかどうかということは分析するうえでは重要である。つまり「食寝一致型」なのか、「食寝分離型」なのかということである。後期高齢単身者は、食事室と寝室が同室となっている食寝一致型の副室食事型が最も多く、夫婦世帯は、6帖に布団を敷いて一緒に寝る「夫婦同一寝型」か、4.5帖と6帖に夫婦別々で寝ている「夫婦別寝型」かである。夫婦別寝型の場合、食事室と寝室が必ず重なることになり、食寝一致型となる。夫婦世帯でベッドで寝ている例は、1例しかなかった。夫婦世帯の場合、狭いので布団就寝になっていると考えられる。

その他の単身者については、食事室のとられ方については明確な傾向ははっきり認められていない。また、単身世帯の食寝一致型については、使用していない方の部屋を子供や孫が来た時泊まる部屋にしているなど、接客用として使用している「接客型」と、物をたくさん置いて納戸のように使用している「納戸型」にさらに分けられる。

以上から、室の使い方は8グループに分けることができる(図6)。

		副室食事型	主室食事型
食寝分離型			
	接客型		
食寝一致型	納戸型		

Figure 6 Living pattern of 2 rooms ( )内・・・ベッド就寝

## 4 住まい方の分類

### 4 1. 分析の視点

これまで、食事・くつろぎ・就寝・接客が行われる部屋とその行為のパターンで8つのグループ分けを行った。夫婦世帯では、一般的に考えると、狭い住戸面積と世帯人数から、食寝分離が普通である。しかし調査結果から、高齢者の住まい方においては一般

的ではないことが分かる。また、単身世帯では、狭い住戸面積にも関わらず、2部屋を有効に使用せずに、1部屋に生活行為を集中させる住まい方が多いことが分かった。

従って、食事・くつろぎ・就寝・接客だけでは住まい方のグループ分けがはっきり分からないので、子供や孫が遊びに来る頻度・夫婦の生活時間の相違・夫婦の健康状態・空調設備・押し入れの位置などの観点から分析を行う。また、主室食事型と副室食事型の定義は、基本的には食事とくつろぎの二つの行為がどちらで行われているかということであるが、食事とくつろぎが分かれている世帯がある。この場合は、くつろぎが行われている部屋によって判断する。くつろぎとは、主にテレビを見る行為であり、くつろぎの場所がある部屋に居る時間が長くなるためである。

### 4 2. 夫婦世帯の場合

夫婦世帯は、宿泊室の確保をしている世帯(2例)、夫婦の生活時間の相違によって住まい方が決まっている世帯(2例)、夫の健康状態によって住まい方が規定されている世帯(2例)、子供や孫が来なく、共働きである世帯(1例)の4つに分類される。

#### (1) 子供や孫が来た時の宿泊室の確保

高齢者にとって子供や孫が遊びに来ることは、楽しみの中でもかなりの位置を占めるものであり当然住まい方には大きく影響すると考えられる。1世帯を除く6世帯が、子供や孫のための受け入れ居室を確保していることが分かった。この6世帯によるグループをさらに分析していく。

第一に、子供や孫が来た時の宿泊室の確保をしているのか、それとも宿泊室に転用しているのかに視点を置く。つまり、後者の方は、子供や孫の受け入れ居室を確保しているからといって、普段一緒に住んでいない子供や孫が中心となった住まい方はしていないということである。よって、後者の世帯にとっての子供や孫が遊びに来るという条件は、住まい方を規定する第2要因であり、他の第1要因の条件により住まい方が規定されているということになる。

逆に、子供や孫が来た時の宿泊室の確保をしている世帯は、他の住まい方の条件よりも宿泊室の確保を第一に優先させている。2世帯がこれに当てはまる(表2、事例番号1,2)。事例1と事例2の世帯の共通性は子供と孫がよく遊びに来て泊まっていくということである。

#### (2) 夫婦の生活時間の相違

子供や孫が来た時1室を宿泊室に転用している残り4世帯の住まい方を規定する第1要因について考える。夫婦の就寝の形に視点を置く。夫婦同一就寝の世帯は3世帯である。他の4世帯は夫婦別寝の世帯であ

り、これが今述べている残り4世帯である。  
 まず、夫婦別寝になる原因を考える。ここで、生活時間に視点を置く。つまり、夫婦の生活時間帯の相違に着目するということである。例えば、夫が仕事で遅く帰って来る等の理由から、夫婦の食事や就寝の時間が合わなくなると室の使い方は変わってくる。このような視点で夫婦別寝の4世帯の住まい方を見てみると、2世帯が生活時間の違いによって夫婦別寝となっている(表2、事例番号3,4)。事例3と事例4の世帯の共通した特徴は、夫と妻の生活の時間帯が異なるため、食事や就寝時間が合わないという点である。どちらも生活時間の相違が原因で、夫婦別寝となり、主室が夫の部屋で、副室が妻の部屋という区分がはっきりではないがなされている。

**(3) 夫の健康状態**

次に視点を置いたのは夫婦の健康状態である。年とともに体力が衰え体は弱り、病気になりやすくな

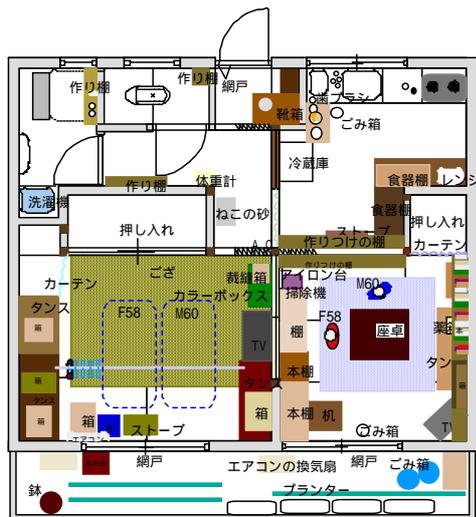
る。高齢者の住まい方には、必ず居住者の健康状態が関わってくる。別寝の残り2世帯は、どちらも夫の健康状態が悪くなく、夫の住戸内での行動範囲は狭い。それによって、台所に近い副室が生活の拠点となる住まい方となる(表2、事例番号5,6)。事例5と事例6の世帯の共通した特徴は、健康状態の度合いは違うが、夫の健康状態によって住まい方が規定されているという点である。また、妻の寝室である主室が、子供や孫が来た時の宿泊室に転用されている。

**(4) 共働き・主室生活拠点型**

最後に、子供や孫が来ない夫婦世帯が1世帯あり、その世帯は共働きで主室に生活拠点を置いている(表2、事例番号5)。主室に生活の拠点を置いている理由として、共働きであるため家にいる時間が少ないということ、主室に押し入れがあるということ、主室にエアコンがあるということが挙げられる。

子供や孫が来た時の宿泊室の確保 (事例番号1)

家族構成：M60-F58 階数：3階 居住年数：31年



娘と幼稚園の孫がよく来るので、泊まる時のことを考慮して主室は布団がすぐ敷ける状態である。普段は夫婦一緒に主室で寝ているがその時だけは夫婦が副室で寝て、娘と孫のために主室を空ける。

Figure 7 Example of living style (No.1)

夫婦の生活時間の相違 (事例番号3)

家族構成：M67-F62 階数：4階 居住年数：31年



夫は退職しており妻は働いている。起床時間が夫婦で違い夫婦別寝となっている。夫は一日家にいる。副室が妻、主室が夫の寝室となっている。夕食は夫婦一緒に主室でとり、生活の拠点は主室である。子供や孫は盆や正月しか帰って来ない。

Figure 8 Example of living style (No.2)

世帯	グループ名		事例番号	世帯構成(年齢)	回答者	居住階数	居住年数	主室(6帖)	副室(4.5帖)	就寝形態	エアコン設置室	接客の有無	備考
夫婦世帯	副室生活拠点型	夫の健康状態	5	夫婦(71, 64)	妻	2	18	就寝(妻)	接客・就寝(夫)・くつろぎ・食事	布団別寝	主室	盆や正月に子供が来る	要介護の夫がいる
			6	夫婦(62, 60)	妻	4	26	就寝・子供、孫の受け入れ	接客・就寝・くつろぎ・食事	布団別寝	主室	子供や孫がよく遊びに来る	夫婦共に足が悪い
		1	夫婦(60, 58)	妻	3	31	就寝・子供、孫の受け入れ	接客・くつろぎ・食事	布団同一寝	主室	子供や孫がよく遊びに来る	子供や孫が来た時は夫婦が副室で寝る	
	主室生活拠点型	子供や孫が来た時宿泊室の確保	2	夫婦(69, 62)	妻	3	27	接客・就寝・くつろぎ・食事	子供、孫の受け入れ	ベッド同一寝	主室	子供や孫がよく遊びに来る	夫婦共に働いていない
			3	夫婦(67, 62)	夫	4	31	接客・就寝・くつろぎ・食事	就寝	布団別寝	主室	盆や正月に子供が来る	夫は退職して妻は働いている
		夫婦の時間の相違	4	夫婦(54, 54)	妻	2	25	接客・就寝・くつろぎ・食事	就寝・子供、孫の受け入れ	布団別寝	主室	娘が時々来る	専業主婦である
			7	夫婦(55, 55)	妻	2	31	接客・就寝・くつろぎ・食事	接客・就寝・くつろぎ・食事	布団同一寝	主室	ほとんど来ない	

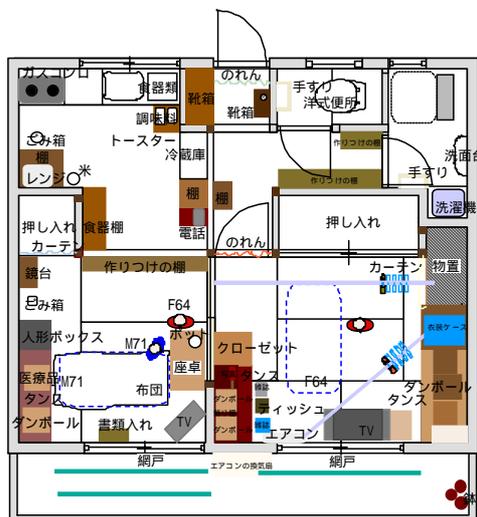
Table 2 Living style of couple

### 4 3 . 単身世帯の場合

単身世帯も夫婦世帯と同様に、副室生活拠点型と主室生活拠点型に大きく分類することができる。さらに分類して、子供や孫が主体となった住まい方をしている、宿泊室を確保している世帯(2例)、体力の低下によって住まい方が規定されている後期高齢世帯(4例)、副室で食事・接客を行い、主室でくつろぎ・就寝を行う接客とくつろぎが分離している世帯(2例)、主室で生活が完結している世帯(2例)、副室が寝室として独立していて、公私分離のの使い方になっている世帯(2例)に分けられる。また、夏季だけ寝室が移動する世帯が2例あった。単身世帯は、副室生活拠点型と主室生活拠点型に分けて説明していく。

#### 夫の健康状態(事例番号5)

家族構成:M71-F64 階数:2階 居住年数:18年



要介護の夫が副室で寝ており、あまり動けないので副室で夫婦で食事をとっている。トイレや玄関には夫のために手すりを付けた。普段副室が夫、主室が妻の寝室となっている。盆や正月に子供や孫が帰って来た時は、主室を子供達が使う。接客、食事は副室であるが、妻は主室のテレビを見て一人でくつろぐことが多く、アイロンをかけた洗濯物をたたむ部屋でもあり、妻の第二の居場所となっている。

Figure 9 Example of living style (No.3)

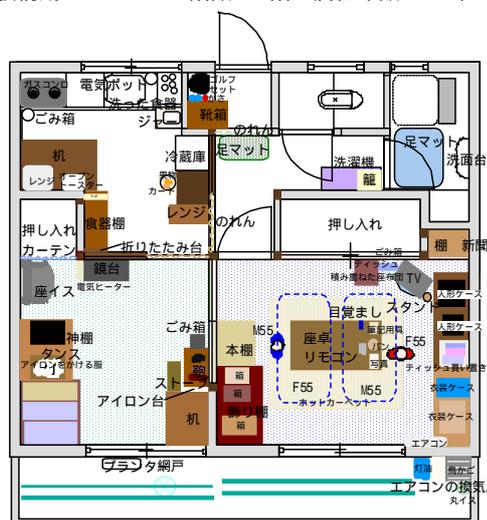
### 4 3 1. 副室生活拠点型

#### (1) 子供や孫が来た時の宿泊室の確保

単身世帯の場合も、まず最初に子供や孫が良く遊びに来るかどうかについて考える。そうすると、子供や孫がよく来るので宿泊室として主室を空けている住まい方をしている単身世帯が2世帯あり、どちらも多人数が来るということであった(表3、事例番号8、9)。子供や孫が来た時主室でみんなで食事をしたりテレビを見たりするので、テレビは主室に置いてあり、普段は副室に生活の拠点を置いているのでテレビは副室から見る。この行為からもわかるように、わざわざテレビをいつも居る場所から遠い隣の主室に置いて見ている、主室を常に空けているという子供や孫を主体とした住まい方をしている。

#### 共働き・主室生活拠点型(事例番号7)

家族構成:M55-F55 階数:4階 居住年数:31年



夫婦共働きで、平日妻は毎日夕方帰宅し、それから食事の準備をして夫婦一緒に食べ、24時には就寝する。次の日朝早く起床し、平日家に居る時間は少ない。休みの日曜に掃除や洗濯、家の雑用や買い物をもとめてしている。食事も就寝も主室で行い、生活の拠点を主室に置いている。また、主室でアイロンかけや洗濯物をたたんだりして、副室には使わなくなった座椅子や机などを置いているが納戸のように使っていない。来客はなく、子供達も来ないので受け入れ居室は確保していない。

Figure 10 Example of living style (No.4)

世帯	グループ名	事例番号	世帯構成(年齢)	回答者	居住階数	居住年数	主室(6帖)	副室(4.5帖)	就寝形態	エアコン設置室	接客の有無	備考			
単身	副室生活拠点型	子供や孫が来た時宿泊室の確保	主室:寝室	8	単身女性(60)	本人	3	3	就寝・子供、孫の受け入れ	接客・くつろぎ・食事	布団	なし	子供や孫がよく遊びに来る		
			主室:余室	9	単身女性(78)	本人	2	31	子供、孫の受け入れ	接客・就寝・くつろぎ・食事	ベッド	副室	子供や孫がよく遊びに来る		
	後期高齢世帯	主室:余室健康状態		10	単身女性(70)	本人	2	16	納戸	接客・就寝・くつろぎ・食事	ベッド	なし	ほとんど来ない	足が悪く、常にベッドに座っている	
				11	単身女性(76)	本人	3		接客	就寝・くつろぎ・食事	ベッド	主室	ほとんど来ない	足が悪く、常にベッドに座っている	
				12	単身女性(80)	本人	1	21	納戸	接客	就寝・くつろぎ・食事	布団	副室	ほとんど来ない	毎日弁当を届けてもらい昼と夜に分けて食べる
				13	単身女性(79)	本人	3	26	納戸		就寝・くつろぎ・食事	布団	主室	ほとんど来ない	夏は主室で寝る

Table 3 Living style of single-person (Main living space is room number 2)

## (2) 生活が副室完結の後期高齢者

子供や孫がない、又はほとんど遊びに来ない残り10世帯の単身世帯の住まい方に注目する。1室で日常生活の全てを行っているかどうかには視点を置く。後期高齢者で体力の衰えている単身者は、副室に生活の拠点を置きそこだけで生活の全てが完結してしまう副室生活拠点型の世帯が4世帯あった(表3、事例番号10, 11, 12, 13)。このグループの特徴は、いつも居る場所が決まっていて、その周りにリモコンや新聞、日用雑貨を置いていることである。

### 4 3 2 . 主室生活拠点型

#### (1) 生活が主室完結

後期高齢者の世帯とは逆に、体力が衰えていない働いている元気な単身世帯が主室で日常生活の全てを行う主室生活拠点型の事例が2世帯あった(表4、事例番号14, 15)。どちらの単身世帯も働いていて、主室で就寝と食事とくつろぎと接客を行い、副室には

普段使わない物などを置いている。

#### (2) 接客とくつろぎの分離

第二に、主室と副室を使って生活している残り4世帯について考える。接客と食事を副室で行い、くつろぎと就寝を主室で行う単身者の事例が2世帯あった(表4、事例番号16, 17)。接客とくつろぎの場が異なる事例はこのグループのみである。

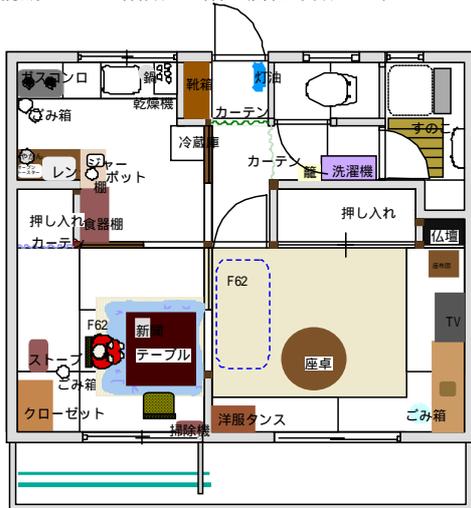
どちらも主室にエアコンを設置しており、主室と副室両方に効かせている。

#### (3) 副室が寝室として独立

残りの2世帯は主室を接客を意識したしつらえとし、食事、くつろぎも行い、副室を寝室として使用している(表4、事例番号18, 19)。プライベートな空間とパブリックな空間とが分かれている公私分化のタイプである。

子供や孫が来た時の宿泊室の確保 (事例番号 8)

家族構成 : F60 階数 : 3 階 居住年数 : 3 年

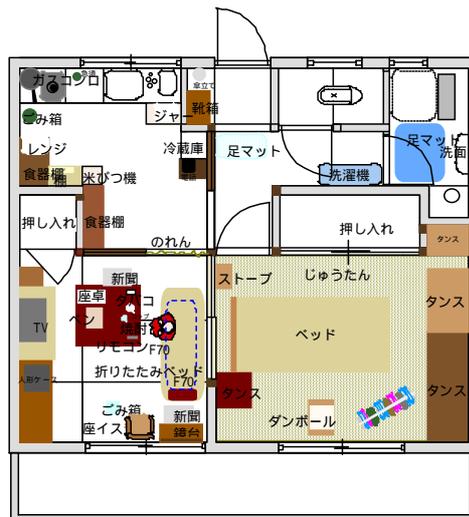


働いていて、食事とくつろぎと接客を副室のテーブルで行う。寝室は主室であり、テレビも主室に置いてあるので、テレビを見る時は副室のテーブルから見る。主室は子供や孫が来た時、みんなで食事をとったり寝たりする場所として常に空けてある。エアコンは設置していない。

Figure 10 Example of living style (No.5)

生活が副室完結の後期高齢者 (事例番号 10)

家族構成 : F70 階数 : 2 階 居住年数 : 16 年



足が悪く、主室にベッドが置いてあるが、副室の折りたたみベッドに常に腰掛けて1日過ごしそのまま寝ている。副室で日常生活の全てを行い、主室は納戸化してベッドは未使用である。

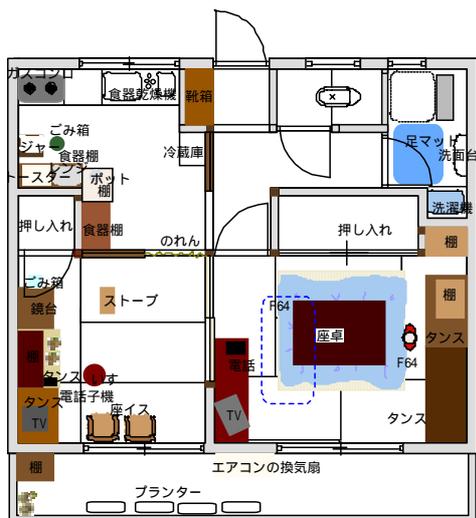
Figure 11 Example of living style (No.6)

世帯	グループ名	事例番号	世帯構成(年齢)	回答者	居住階数	居住年数	主室(6帖)	副室(4.5帖)	就寝形態	エアコン設置室	接客の有無	備考
単身	主室生活拠点型	副室:食事・接客 主室:くつろぎ・就寝	夏季 寝室移動	16	単身女性(71)	本人	4 14	就寝・くつろぎ	接客・食事	ベッド	副室	ほとんど来ない 夏は副室で寝る
				17	単身女性(54)	本人	3 1	就寝・くつろぎ	接客・食事	布団	主室	友達が時々来る
	勤務	副室:余室		14	単身女性(64)	本人	2 5	接客・就寝・くつろぎ・食事	納戸	布団	主室	兄が時々来る
				15	単身女性(58)	本人	4 31	接客・就寝・くつろぎ・食事	納戸	布団	主室	子供や孫が時々遊びに来る
				18	単身女性(70)	本人	3 25	接客・くつろぎ・食事	就寝	布団	主室	娘が時々来る
				19	単身女性(64)	本人	3 1	接客・くつろぎ・食事	就寝	ベッド	主室	友達が時々来る

Table 4 Living style of single-person (Main living space is room number 1)

生活が主室完結 (事例番号 14)

家族構成 : F64 階数 : 2 階 居住年数 : 5 年

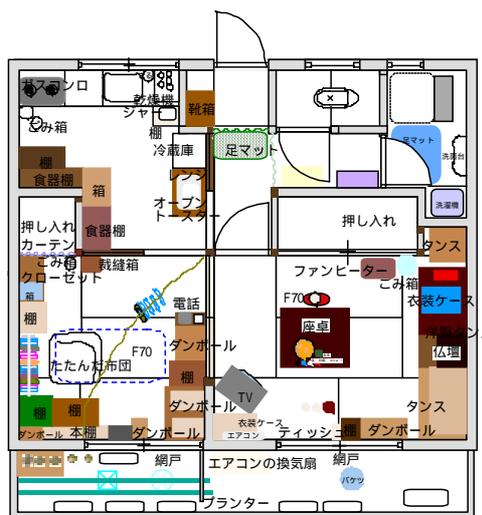


働いていて、子供はない。主室にエアコンを設置していて、食事・就寝・接客・くつろぎを行う。エアコンは主室のみに効かせる。副室はもうすぐ捨てる座椅子を置いたり、アイロンや洗濯物をたため部屋として使っている。

Figure 12 Example of living style (No.7)

副室が寝室として独立 (事例番号 18)

家族構成 : F70 階数 : 3 階 居住年数 : 25 年

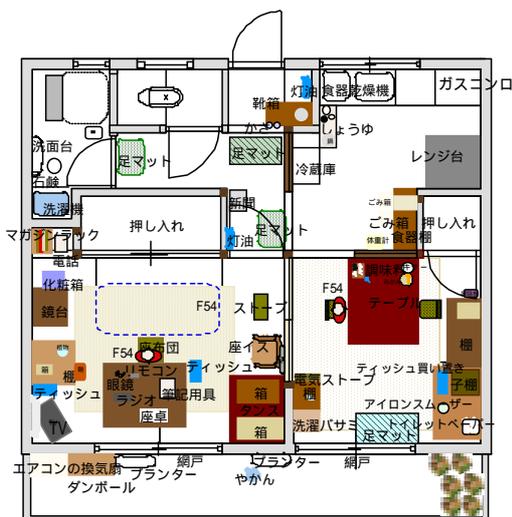


働いておらず、毎日畑仕事をしたり趣味をして過ごしている。主室で食事・接客・くつろぎを行い、副室に布団を敷いて寝る。布団はたたんだまま置いてあり、一緒に住んでない娘の荷物が副室にたくさん置いてある。娘が来た時は主室で寝る。

Figure 14 Example of living style (No.9)

接客とくつろぎの分離 (事例番号 17)

家族構成 : F54 階数 : 3 階 居住年数 : 1 年



働いていて、子供はいない。主室は就寝とくつろぎを行う場であり、副室のテーブルで食事と接客を行う。働いていて、子供はなく、主室の座卓に座って趣味をやったりテレビを見たりして休日を過ごす。副室のテーブルで食事をとり接客も行うが、時々主室で食事をとることもある。

Figure 13 Example of living style (No.8)

5. 考察

まず、住まい方の分類の仕方を図 15 にそって説明する。夫婦世帯を「子供や孫が来た時宿泊室の確保をしている世帯」「夫婦の生活時間が異なる世帯」「夫の健康状態が良くない世帯」「共働きで主室生活拠点型の世帯」の5つに分類し、単身世帯を「子供や孫が来た時宿泊室の確保をしている世帯」「生活副室で完結している後期高齢者」「生活が主室で完結している世帯」「接客とくつろぎが分離している世帯」「副室が寝室として独立している世帯」の5つに分類される。

5 1 . 夫婦世帯

夫婦世帯の副室生活拠点型のグループは、夫の健康状態が良くないために夫に合わせて副室に生活の拠点を置いている(表2、事例番号5,6)。副室は夫の寝室であり主室が妻の寝室であるが、子供や孫が来た時は主室で寝ている妻が、副室で夫と一緒に寝て、主室を子供や孫の受け入れ居室として空ける。これは、主室生活拠点型である夫婦の生活時間の相違により夫婦別寝となっているグループの1世帯と共通する点である(表2、事例番号4)。この世帯も、普段妻が副室で寝ているが、子供が帰って来た時は副室を子供の寝室として空けて、夫婦は主室で一緒に寝ている。この3世帯は、住まい方を規定する第一要因に、夫の健康状態、夫婦の生活時間の相違があり、子供や孫が来た時に妻の寝室を宿泊室に転用するとい

うグループでもある。次に、子供や孫がよく遊びに来るので、そのことを第一要因としている世帯のグループである(表2、事例番号1,2)。2世帯あるが、副室拠点型と主室拠点型に分かれる。これは、前述したように、布団就寝とベッド就寝、家具の多さが原因である。夫婦共働きで子供や孫が遊びに来ることがない世帯が1世帯あり、主室拠点型の夫婦同一就寝である(表2、事例番号7)。これら3世帯は、夫婦同一就寝というグループでもある。

### 5 2. 単身世帯

単身世帯の副室生活拠点型のグループは、子供や孫が来た時の宿泊室を確保している世帯であり、主室を普段から空けていて、普段は副室が生活の拠点であるが、みんなで見るためにテレビを置き、子供や孫が中心の住まい方をしている(表3、事例番号8,9)。もう一方の副室生活拠点型のグループは、後期高齢者で体力の低下が原因で副室で生活が完結している世帯である(表3、事例番号10,11,12,13)。主室の方はほとんど使っていない状態である。この中の1世帯と、主室生活拠点型の、副室で食事・接客を行い、主室でくつろぎ・就寝を行っている2世帯の内1世帯に共通する点は、夏になると寝室が移動するという点である(表3、事例番号13 表4、事例番号18)。後期高齢者の方は、冬は副室のコタツで暖まりながら寝るが、夏はその

必要がなく副室の座卓を除けて布団を敷くのは大変なので主室に布団を敷いたままにして、寝るときだけ広げるという住まい方である。もう一方は、最上階であり西日が強いということが原因であり、両世帯の理由は異なる。

主室生活拠点型の、副室で就寝を行い、主室で食事・くつろぎ・接客を行っている2世帯は、主室を接客を意識したしつらえとし、副室を寝室として独立させた住まい方である(表4、事例番号18,19)。残りの副室が余室となっているグループは、主室で生活が完結している(表4、事例番号14,15)。前述したように、エアコンの位置、押し入れの位置が原因である。

また、エアコンの位置を単身世帯だけではなく夫婦世帯の住まい方において考えてみる。夫婦世帯は7世帯とも主室にエアコンを設置している。それにも関わらず、副室拠点型が3世帯ある。これは、夫の健康状態によって住まい方が規定されているグループは、主室と副室の間の建具は常に開けていることと、子供や孫が時々遊びに来て、その時は主室が受け入れ居室に転用されることが原因であると考えられる。また、子供や孫が来た時宿泊室の確保をしている1世帯は、普段夫婦の寝室が主室であることと、子供や孫が来た時主室を子供や孫の宿泊室や受け入れ居室に転用することが原因である。

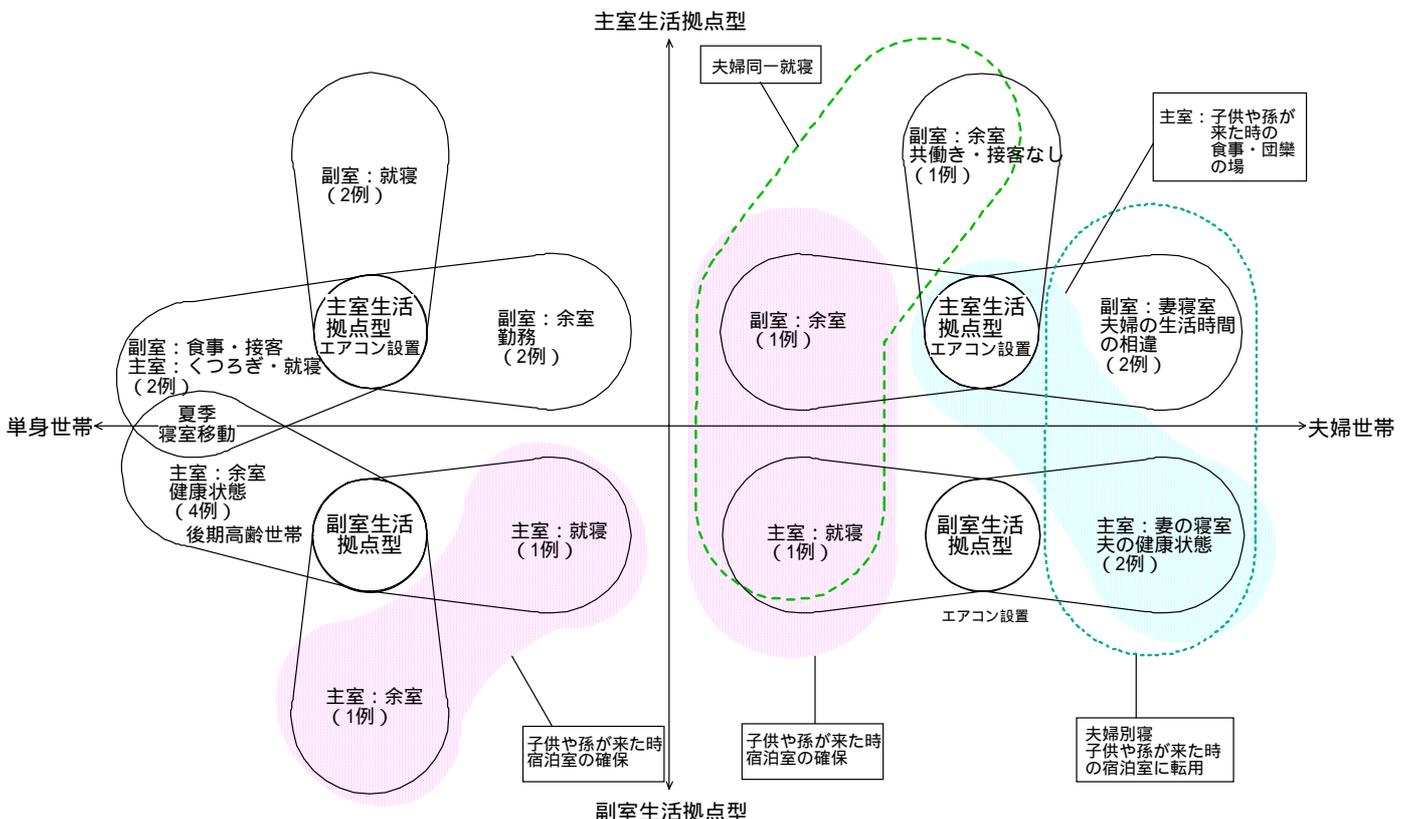


Figure 15 Summary of living styles

主室生活拠点型の世帯は、普段居る主室にエアコンを設置するのは当然のことである。

## 6. まとめ

以上、夫婦世帯と単身世帯の住まい方の分析結果を述べた。以下にHS団地の住まい方の特徴を挙げる。第一に、年齢層及び世帯人数、子供や孫が泊まりに来るなどの来客が頻繁にあるかないかによって室の使われ方が異なるということ。第二に、エアコンの設置場所と押し入れの位置は住まい方を規定する大きな要因となるということ。第三に、夫の健康状態が良くない世帯、年齢による体力の衰えによって、生活が副室の1室で完結している後期高齢世帯に共通している健康状態の悪化は、台所に近い副室に生活を集中させる要因であると考えられるということ。以上の特徴をまとめると、年齢による変化と多様な家族類型、異なるライフスタイルに対応できる居住空間の確立、子供や孫等の来訪時の受け入れ居室の確保という課題が挙げられる。しかし、このHS団地の34.56㎡という狭小な住戸面積では、夫婦世帯や子供や孫のための受け入れ居室を確保しなければならない単身世帯が快適に住み続けることは難しいと考えられる。アンケート結果からもうかがえるように、居住者が一番改善を望む場所は水廻りの設備である。水廻りを改善すると、どうしても現在の居室の方の面積が狭くなってしまい、2室を確保することは困難となる。

よって、夫婦世帯や子供や孫が頻繁に泊まりに来る単身世帯に対しては、面積の拡大を伴わない1DKタイプへの住戸改善では対応が難しいものと考えられる。

## 参考文献

- 1)古賀 紀江、高橋 鷹志、一人暮らしの高齢者の常座をめぐる考察、日本建築学会計画系論文集 第494号、1997年4月
- 2)増永 理彦、米原 慶子、富樫 穎、公団賃貸住宅における単身高齢者の住戸内生活行為に関する研究、日本建築学会計画系論文集 第551号、2002年1月
- 3)巖 平、横山 俊祐、シルバーハウジングにおける近隣交流の特性と空間的課題 - 高齢者の豊かな居住環境創造に関する研究 その2 -、日本建築学会計画系論文集 第554号、2002年4月
- 4)橘 弘志、高橋 鷹志、一人暮らし高齢者の生活における住戸内外の関わりに関する考察、日本建築学会計画系論文集 第515号、1999年1月

(平成15年8月29日受理)